



(第33号)

発行所 〒260-0853
千葉市中央区葛城1-5-2
県立千葉高等学校同窓会
印刷所 千葉市中央区末広2-1-16
電話 (268) 2355 (代)
株式会社 千葉羅池社

一二五周年記念事業目標達成!

「同窓の心 後輩に伝わる」



同窓会会長 霜 禮次郎

十五年十二月二十二日終業式に於て、同窓会記念事業実行委員会は、在校生を前にして記念事業の贈呈式を行った。多くの同窓生の本記念事業に対するご理解とご協力により目標金額五千万円を大きく突破し、別記の通り全ての事業を滞りなく終了し、後輩の為に教育環境の整備のお手伝いが出来た事を共に喜び合いたいと思います。本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。

振り返ってみますと、同窓会長という大役を仰せ付かってまもなく、創立以来の学校制度の改革の波が押し寄せる気配が出

て来た頃に、当時の和久校長先生に「二十一世紀を背負う後輩の為に何か同窓会が出来る事はないでしょうか。」と尋ねた時に、和久校長先生は「同窓会におねだりしてよろしいでしょうか。」と控えめな態度で云われて本記念行事の骨子を発案されました。後任の佐藤校長先生には具体案を作成して頂き、積極的に推進して頂きました。又、現大野校長先生には日夜各事業部会と会合を持ち、学校側との間に入って頂き、情熱を込めて事業の実践遂行して頂きました。

又、現場、教育委員会、国税

局の対応には、丸事務長に献身的なご努力があった事を改めて感謝申し上げます。

以上述べたように、本事業の評価は現在の公立高等学校としての母校を想う時に、時代の先取りとして決断して良かったと思っております。これから教育環境の向上は、教職員の質的向上と共に、各校にその設備費の負担がかなり求められると思います。

この度、中高一貫の方針が打ち出され、我が母校が公立校と

学校は今、新たな出発に向けて



校長 大野 敬三

着任以来早くも一年間が過ぎようとしています。昭和四十四年に県立高校の保健体育の教員になって以来、三十五年間、体育・スポーツ一筋に過ごしてきた私にとっては、

本校勤務は真に新しい経験であり、学習と試みの日々といえます。そしてそこには、三

して白羽の矢が立ったことは、教育界において大きなインパクトになると思います。我が母校の大きな発展を我々同窓生はもとより、千葉県民が望んでいる事を認識し、改めて本事業がセルフイメージ(自分らしさ)の向上につながっていくものと信じてやみません。

最後になりましたが、昭和九年卒の清水先輩には、多額の御寄付と同時に立派な美術絵画を御寄贈頂きました事を深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

十八年間(昭和四十年本校卒業)という時空を超えて出会う千葉高生の姿があり、奉職十年余の教員時代の私の姿も思い出され、厳しく忙しい中にも楽しみのある生活を過ごさせていただいています。

母校での勤務、これは望んでも叶うことのできないこと

であり、前任の佐藤校長を始め多くの先人の皆様の実績や思いを無にすることのないよう精一杯努力する所存です。でよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年は本校創立一二五周年ということで、同窓の皆様にはそのお力を結集し素晴らしい記念事業を推進していただきました。トレニンブルームの建設、ビオトープの造成、校歌碑の設置、記念館の改修、そして楽器の寄贈等です。これらの事業は、生徒の学習に配慮し、七月から八月にかけての夏季休業中を中心に行われ、十月末に完成となりました。

そして十二月二十二日終業式に先立ち、同窓会記念事業実行委員会役員の皆様の出席のもと、全校生徒、教職員が参加して披露式を行いました。いよいよ今年より、皆様からの思いのこもったこれらの施設及び器具を本校として利用させていただくことになりました。本校生徒、教職員一人ひとりがその心を受けとり、大切に有効に利用してまいり

たいと存じます。また残余の寄付金についても学校環境整備の費用としていただけること、併せてお礼申し上げます。

加えて、本校の本来の財産は、すぐれた生徒、教職員であることはもちろんですが、一方では同窓の皆様であると考えます。先行き不透明で激動の時代にあつて、同窓の皆様の社会におけるご活躍はそのまま本校の財産といえます。そこで今後、皆様のその姿を生徒が身近に感じ、直接交流の中で、将来の夢や希望を育み、そしてその実現に向けての活力とすることができような事業を実施したいと考えています。その際には格別のご高配をいただければと思います。

ところで、昨年十一月、本校に直接影響のある学校再編第二期プログラム(案)が発表されました。この案では、本校には平成二十年に二学級規模の中学校を併設する。定時制は、現県立生浜高校を三部制の定時制とし十九年より募集を行うことに伴い、十九

年に募集を停止し、二十年に在校生は生浜高校に転学する。そして今後バブリックコメントの期間を設け、その意見等を踏まえながら、今春には最終決定するというものです。

教育改革は今、その最中にあるといえます。少子高齢化、個性の尊重と多様化、高度化、高度情報化とグローバル化、社会構造の老朽化等社会の急激な変化に対応する改革で、学校の特徴化、教育課程の弾力化、入試方法の改善、少人数授業・学級の工夫、教職員採用試験の改善そして学校再編などです。

中でも学校再編に関する案は県民各界を代表する委員の方々により公開された会議において二年間をかけて検討され十四年公表されました。そこには再編の総論というべき内容が示されています。これに基づき各論ともいえる具体的な個々の案が第一期・第二期と示された訳です。私は中高一貫教育についても、高設定時制三部制についても総論は賛成です。ただ各論となると、まして我が学校というこ

とになると、乗り越えなければならぬ課題も具現化され、夢と理想、不安と責任が複雑にからまり、よほど腹を据えなければと思つていきます。

ただ今は、一つには、現在いる生徒が動揺することなく、各々の目標に向かい最大限に力を発揮することができるよう、二つには、最終決定の時期までその経緯を見守り、結論が出されれば、それに向かい勇気を持って肅々と、最善を尽くそうと考えているところ。本校教職員と共に一丸となって確実な歩みを進めてまいりたいと思つていきます。

このような時期でもあり、同窓の皆様の一層のご指導、ご支援、ご協力を切にお願いし、同窓会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



千葉高等学校校歌

(昭和23年9月15日制定)

松原至大 作詞 (明治四十三年本校卒)
弘田龍太郎 作曲 (東京音楽学校教授)

校歌の原典

鈴木定雄 (昭和二十五年卒)

- 一、袖が浦辺の 明け暮れに、
波路はるかに 仰ぎ見る
富士の高根の すなおさは、
われ等健児の 生命なり。
- 二、葛の葉しげき 岡という
古きゆかりの 地に生まれ、
正しき文化 推し進め、
若人出でて 幾春秋。
- 三、遠き歴史は 力なり、
母校のほまれ、身につけて、
世界平和の 民となり、
今日を歩まん われ等みな。

♩ = 112

1. ソ デ ガ ウー ラー ベ ノ ア ケ クー レ ニ
2. く ゅ の は しー げ き お か とー い う
3. ト オ キ レー キー シ ハ チ カ ラー ナ リ

ナ ミ ジ ハ ル カ ニ ア オー ギー ミ ル
ふー る き ゆ か り の ち にー うー ま れ
ホ コ ウ ノ ホ マー レ ミ ニー ツー ケ テ

フー ジ ノ タ カ ネ ノ ス ナ オ サ ハ ワー レー ラ ケン
た だ し き ぶー ん か お し す す め わー こ う ビ い
セー カ イ ヘイ ワ ノ タ ミ ト ナ リ キョウ ヲー ア ユ

ジ ノ イ ノー ナ ナ リ
マ て い くー し ゅ ん じ ゅ う
マ ン ワ レー ラ ミ ナ

出典 創立八十周年記念誌 百五頁・内表紙裏

千葉中學校校歌

(大正4年制定)

千葉中學校 作詞
楠見恩三郎 作曲 (東京音楽学校教授)

- 一、雲に聳ゆる富士の高根
空に連なる袖の浦波、
遙けきこの海尊きこの山、
皇大君の廣き恵、
山より高く海より深し、
いとも畏み仕へまつらん、
いざいざいざや。
- 二、緑覆へる葛葉の岡、
流れたゆまぬ都川水、
深きは其水繁きは其蔭、
さはなる功こもれる學舎、
幾入そめて緑はまさる、
教へつ、しみ應へまつらん、
いざいざいざや。
- 三、雪にみがける心の玉、
螢てらせる學の大路、
たどるや我が道守るや我が魂、
學の友のかたき望み、
暑さにきたへ寒さに凝りて、
日々にいそしみつとめはげまん、
いざいざいざや。

(1) クモニ ソ ビ ユ ル フジノター カを ネ ソラニ ツ ラ ナ ル
(2) みどり お ほ くずはの ココロノー タ マ ホタル テ ラ ユ マ ぬ
(3) ユキニ ミ ガ ケ ル ココロノー タ マ ホタル テ ラ ユ マ ぬ

ソ デ ノ ウ ガ ラ ナ ミ フ ハ ル ケ キ コ ノー ウ ミ タ フ ト キ コ ノー ヤ マ
マ ナ ビ は オ ホ チ タ ト ル ヤ そ のー み づ し げ き は そ のー マ げ
マ ナ ビ は オ ホ チ タ ト ル ヤ そ のー み づ し げ き は そ のー マ げ

ス メ オ ホ ギー ミ ノ ヒ ロ ケ キ ナ グ ヤ ヤ ヨ リ リ タ カ
は ナ ナ トー モ を こ も れ る まー ミ ヤ ヰ し ほ そ め
マ ナ トー モ を こ も れ る まー ミ ヤ ヰ し ほ そ め

ウ ミ ヨ リ リ フ カ シ シ カ ツ コ ミ ツ カ ヘ マ ツ ラ
ミ ビ ヰ サ は ま り さ る テ イ ト モ カ シ ミ ミ ツ カ ヘ マ ツ ラ
サ ヰ サ ニ コ リ テ ヒ ビ ニ イ ソ ン シ ミ ツ カ ヘ マ ツ ラ

イ ザ ザ イ ザ ザ イ ザ ザ
い い ザ い ザ い い ザ
い い ザ い ザ い い ザ

出典 創立四十年千葉中學校要覽二頁
千葉高等学校創立七十周年記念に際して奥付上欄
創立八十周年記念誌八十五頁

このたび中台誠 (昭和三十三年卒) 氏のお力添えを得て母校校歌の原点に辿り着き、次記のとおり一応の原典としてみましたので参考に供され異見ある場合は、出典を明示の上同窓会事務局へ御一報頂きたいと存じます。

学 年 短 信

●昭和四年卒

桜井義也

卒業以来七十余年、当然のことながら同窓生の数は少なくなつてきております。現在私の手許でお附合ひしている友は、飯豊、関、増田、湯原、立原、宇佐美の五君ぐらいで、あとの方々は御無沙汰中で不明です。何年経つても母校は懐しいもの。未だに葛城台上の学校を思い出し、時折応援歌など口ずさんでます。

従来毎年秋には会合を開いて友情をあたためあつておりましたが、こゝ数年集る人数も一、二名という状態になつてきたのでやっております。

然し残つた連中はいずれも母校の発展活躍ぶりを喜んでおります。後輩の皆様方、母校のため大いに頑張つて下さい。



●昭和八年卒

安田 衛

平成十五年の昭八会は九月二十六日梅松屋で開催、遠藤、大木、加地、金子、安田、山口、吉野の七名が参加した。まず長らく病氣であつた内山君が本年七月永眠されたので一同黙禱して冥福を祈つた。本年は千葉中学卒業七〇周年を迎え一同満八十八歳になつたが元気に会合できお互いに喜びあつた。十年前の卒業六十周年の際は来賓四名を含めて二十三名が出席、盛会であつたことが思い出される。区切りのよい今回の会合を契機として解散するかどうかが討議されたが明年も開催すること、なつた。和気あいあいの懇談が続いたあと校歌、凱旋歌を斉唱して午後三時閉会した。

●昭和九年卒

佐久間 疆

私は、昭和九年卒業で九和会といい、これまで何回か執筆してきたが、だんだん高齢化して物故者がふえてきたので、今回は、同期でなくても同窓であれば、許してもらいたい。

私は、行政官をやめてから、亡父が創立した千葉経済学園の経営にあたつてゐる。今年はその創立七〇周年にあたるので、過日その記念式典をやつた。その来賓として、沼田武さん（前県知事）と鶴岡啓一さん（千葉市長）をお招きして、祝辞をいただいた。御両人は、千葉高の同窓であるだけでなく、私の個人的に親しい仲であつた。沼田さんは、戦後間もない頃私が県の人事課長をしている時面接した方であるし、鶴岡さんは、私が自治省行政局長をしている時、同省に入省された方である。

昭和十一年三月卒業生（一七四名）の集い、土曜会“は今年で三十五回を数える。しかし、一昨年頃から物故者は一、二名に達している。その上、年齢八十五才ともなると体調をくずし、気力も衰えるのは否めない。集る者はここ数年漸減し、やむなく集いに幕

●昭和十一年卒

佐瀬喜一

を

をおろしている。すこやかに老いゆく事の難しさ“を痛感する。十二月（平成十五年）に石出康君の訃報に接し、入院中の友人からも連絡があつた。だが残された者は、卒寿（九十才）までは何としても元気で頑張ろうとお互い励まし合う。会長は、長谷川泉君（森鷗外記念会理事長）、幹事は、新藤栄一、向井十郎両君と筆者。

●昭和十二年卒

古川 芳

平成十五年の十二会（昭和十二年卒業の同窓会）は、十月二十一日、京成ホテル八階の日本間に開催。高齢のため、出席者は十二名でしたが、会は盛り上がり、当時の厳しい五年間の中学校教育、定期試験の都度張り出された成績発表、富士の裾野の演習、一月の朝六時からの柔・剣道の寒稽古等々、そして各自の戦争体験、又復員後から現況へと話は尽きず、この会も今回限りかと思いましたが、まだ継続する様にとの声もあがり、最後に千葉中学校歌を合唱し

て解散。

次に左記の四名の方々が逝去されました。

香川成治君 (15・11・13)

佐野芳雄君 (15・4・)

浜田和夫君 (14・10・5)

菊川武夫君 (14・11・30)

謹んで御冥福を御祈り致します。

●昭和十三年卒

鈴木尚純

いざや会の総会は、平成十五年十月二日(木)船橋市の稲荷屋にて十二時半より開催した。出席者は八名で、稍稍淋しい同窓会となった。

出席者は皆元気で、在学中に行はれたオロチョン民族代表という詐欺師の講演、塩谷温先生の日本外史の朗読、名人と云はれた野村万作氏と山本東次郎氏の狂言、桃川燕若、燕林の講談、さびしかった諸先生の話など中学時代の数々の思い出など大変盛上った二時間を過ごした。今年回の五名の方が逝去されました。

河野義郎君、嶋田義晴君、鈴木三郎君、日暮猛君、森高彦

君。

謹んで御冥福を御祈り致します。我々の年令になると色々病気持で、私自身健康に最大限の注意を払っております。昭和八年卒業の先輩が同窓会を実施していることに刺激され、いざや会の維持に鋭意努力致します。

●昭和十五年卒

古川清房

本年三月、級友全員が満八才を迎えたので、五月、記念文集〈傘寿感懐〉を作成した。さきで作成した〈古稀随想〉へ喜寿万感と合せ三部作を完成、この発刊記念と敍勲賞受章者(昨秋)の沼田武、鶴沢丈助両君の祝賀をかね、七月二日(水)正午プラザ菜の花において本年度の葛城一五会開催。出席二十名余興として詩吟、民謡等があり、楽しい祝賀の会となった。また本年は昭和十八年十二月の学徒出陣から六十周年、その年は我々が壯丁となった年でもあり、平成十五年は葛城一五会にとつて大きな区切りの年となった。

〔逝去者〕

齊藤忠男 (平14・11/29)

一 (平15・1/1) 甘粕長次

(5/5) 織戸 清 (5/23)

●昭和十六年卒

高橋秀夫

四月十二日(土)に恒例の「千中第五十五回クラス会」をJR千葉駅ビル五階のペリエホールにて開催した。参加者は二十一名、各自から近況、自分の体調、旅行のことなどを披露し楽しい時を過ごした。

クラス会は千葉中学を卒業、戦争の時代を経て、日本経済がオイルショックから脱却し再建の途上にあつた時、鈴木修君の肝煎りで開催したのが始まりである。爾来会場は幾度かわわつたが、平成九年からペリエホールとなり、現在に至っている。

その節、会員の大部分が八十歳の高齢となり、また健康上欠席する者が多くなったことを勘案し、今回を以つて会を解散し、爾後一年に一回ぐらい有志相集い懇親会を持つことが出席者全員の賛成承認が得られた。

昭和五十一年六月二十六日に

第一号が発行された「クラス会報」も平成十四年十一月の第三十二号を以つて、会の解散に伴い、終了することとなった。

その企画、編集、印刷、配送等に付きお骨折を願った鈴木修君に感謝を捧げたいと思ひます。

同級生の追悼文、恩師の早崎、石山、両先生の寄稿、旅行記、会員各自の動静等が掲載され、その発行が楽しみに心待ちされた。

本年度の逝去者は、
吉野和之君 (平15・3・27)
天野 栄君 (平15・4・28)
謹んでご冥福をお祈り致します。

以上

●昭和十七年卒

早山卓夫

昔は苦にならなかつた一杯坂も徒歩で登るのが極めて辛くなつて来た吾が身にひきかえ元気な顔を見せてくれる仲間が何人も居ることは嬉しい限りです。

たゞ年令と共に病気の人も多く入院中、在宅療養中、又は体調不良で出歩けない人もかなり

居て淋しい思いもします。本年は池田寛・高宮光輝・長谷部美己、三君の訃報をき、深く哀悼の気持を捧げる次第です。

この様な状況の中十一月二十九日例年どおり千葉駅ビルで同窓会を開催。釜石の津田君や所沢の石野君などいつもの様に元気な人、岩下正雄君、末永卓三君など久し振りが若々しい人達の参加があり、昨年より一名多い二十九名で和やかでかつ賑やかな会であった。

会員の協力で毎回楽しい集いが続いて来たが将来は高齢体力等を考えてより楽しい会になるよう計画したいと思っている。

●昭和二十年四卒

(禄寿会) 佐藤守孝

私たちは六十回生だから毎年六月十日を中心にした日曜日に千葉市ほてい家に於て開催しており、こしは六月八日に三十五名が参加した。

昨年の会合以降九名が鬼籍に入ったが、中には芦屋市で開業していた堂野前 崇君のように五月に欠席の返信を出した直後に急逝した例もあり、だんだん

に仲間が減っていくことを実感させられている。物故者に対し心から冥福を祈りたい。

所感を述べるものと、旧友の消息を求めるものなど、和気あいあいの懇親会は時の経つのを忘れさせた。幹事はどうやら永久幹事になってしまったようだが、来年も一人でも多く元気で集まってくれるように念じている。

●昭和二十年五卒

平野久夫

わが同期会(新葉会という)も、千葉中卒業以来すでに五十八年、早く生まれた者は、今年で喜寿を迎えることになった。

そこで、十月十五日、千葉市京成ホテルで喜寿記念の総会を開いた。

年とともに物故者も増え、果たして何人集まるかと心配されたが、それでも五十名が集まって、昔をしのび、楽しい時間を過ごした。

ただ、この会の発足以来の中心メンバーで、今回の総会準備も一人で雑事を引き受けて奮闘してくれた平塚和夫君が、総会直前の十月六日、胃癌の手術直

後に心臓発作を起こし、急逝されたのは痛恨の極みであった。

入学当時の仲間の約三分の一が、すでに彼岸に旅立って行った。残されたわれわれは、少しでも長く元気で、これからの人生を楽しもうと誓い合い、再会を約して散会した。

●昭和二十二年卒

斉藤喜久三

昭和二十一、二十二年「海鮮料理三昧」同窓会

恒例六月第一土曜日一泊、標記の同期会を内房岩井の魚赤旅館にて開催、この企画は元氣印を自負する戦争っ子の我が年度も寄る年波の七十四歳にはそろそろお手上げの状態になってはいけないと、こゝらで旨い物を食べ乍らゆつくり話を、又夜通し碁の会をの発案により開催となりました。我々の意を汲んで

の旅館の家族総出のサービスと一人一枚の鮑の踊り焼き、盛り沢山の舟盛りで標記にふさわしい内容でした。席上本年他界した関谷君、陳野原君の奥様より亡くなった主人も是非同席させての意思により一本づつの頂き

での祝盃後お互い再来年に近づいた喜寿同窓会には皆元気で再会を約束して納会。

前記の関谷君は甲子園町に在住する事三十余年、母校よ日も早く来れ、来りなば諸兄を家庭を上げての歓待を用意の熱血漢であった。又陳野原君は戦後千葉高野球部再開の草分けであり早く軟式野球部の主将となり昭和二十一年より復活した全国中等学校野球選手権大会の硬式への橋渡しをした功労者でもあり、又同期会の名司会振りが見られなくなるのは誠に残念なことである。両兄に合掌。





●昭和二十四年卒

安田敬一

葛城美美葉会は、昭和十八年四月三日、桜が満開の葛城ヶ丘、千葉中に入學し、昭和二十三年に千葉中学校、昭和二十四年に千葉高校をそれぞれ卒業した学友（総計三二〇名）が毎年相聚う会。平成十五年は丁度入学六十周年記念、母校創立一二五周年と重なる意義深い年でした。

四月二十九日は（みどりの日）菜の花会館四階に恩師安西、早川、篠崎三先生をお迎えし、盛大かつ和やかな会となり、恒例の今井喜久男君の指揮による応援歌、千葉中学校歌、千葉高校歌を一同声高らかに歌いました。

千葉中、千葉高の良き伝統を併せもつことができた六年間は他の経験とは比較にならない最も楽しくかつ貴重な時代。生涯を通しての優れた良い友をえることができた母校の有難さをいつも思い出しています。

今年も渡部正男君をはじめ多くの幹部諸兄の御努力により、同じ菜の花会館、同じみどりの日の佳き日に開催されます。

同期の諸兄の御参加を今からお待ちしております。

●昭和二十五年卒

矢島 肇

アテネオリンピックの今年、四月二十九日に同期会は開催される。古稀を超えると、四年に一度の会が待ち遠しいとの声が聞こえる。あつという間だった四年が、最近では遠く長い四年に感じて来た。事実、この四年間に亡くなられたり、闘病生活に過す友が増えて来ている。減つても増える事のない掛け替えのない友ならば寂しい限りである。それだけに同期会での再会には、お互いの健康を確め合い、明日の糧にする意義深い会だ。孫の話、健康の話に終始せず、せめてこの一時は、往時を思い明日への夢を追い求める会であつて欲しい。そんな願いを持ちながら、互選されたクラス世話人九名は、準備に入っている最中である。



●昭和二十七年卒(二七会)

中村作二

我々二七会は、一昨年三月に卒業五十周年を迎え、ば・る・る千葉に於いて記念の同期会を開催すると共に、記念事業として学校の玄関を入ったところに種谷扇舟先生書の『感謝之一生』という額を寄贈しました。また卒業三十周年の時に玄関の上に校章を寄贈しましたが、その入口わきに付けてあったプレートを新しいものに付けかえました。

それで今年の三月を以って全員が古稀を迎えますので、今年には「古稀の集い」を開きたいと思っています。

七十歳は

「古代稀なり、現代ザラなり」

●昭和二十七年卒(定)

奥井康雄

葛の花会総会

平成十五年度葛の花会総会が六月十五日千葉市の「プラザ菜の花」で開催されました。

当日は、霜同窓会長、大野校長、田村教頭、丸事務長等のご

出席をいただきました。

同窓の出席は、五十二名で平成の卒業生が二名出席してくれました。

卒業生が三千五百名を越えた現在、出席者が少ないと思えますが。

会長、校長からご挨拶をいただき会は始まりました。

懇親会は、各テーブルともなごやかに、そして活気あふれる楽しいものでした。先生方と同窓と一緒に昔話に興じました。

最後に校歌を歌い、来年の再会を誓いました。

(注・葛の花会は定時制の同窓会の名称です)

●昭和二十八年卒

埴 鐵夫

二八会。昭和二十八年卒同窓会名です。五十周年記念の会を昨年四月にとりおこないました。

私達は毎年、四月第一日曜日の午後一時から、定期総会と懇親会を開催し続けています。例年八十名前後の参会者です。

昭和二十年八月十五日。蒼穹に暑い蝉しぐれの正午。太平洋

戦争の終結が宣言された。小学校五年生。往年の美少年美少女が古希を迎えます。

世界歴史に残る日本の復活。そしてこれを持った世代。

『戦い済んで日が暮れて』

『往事渺茫』『邯鄲之夢枕』

『人間万事塞翁が馬』

などなどの言葉がよぎる昨今です。しかし現代日本での実質年齢は七掛け。七十才×七＝四十九才です。

これからの二十年が、稲の実る黄金の季節。『生活習慣を整え健康に生きよう』を合言葉に致したく。

●昭和二十九年卒(福の会)

小野口勝世

平成十五年の福の会総会は六月二十九日京成ホテルミラマーレで開催。安西先生、稲葉先生、南波先生、早川先生にご出席いただき、八十一名が参加、近年にない多数の参加で盛り上がる。中に同期結婚組が四組いたので、壇上にあげ肴にする。当人たちは怒っていたが、肴になるのも華の内、金婚過ぎても揃って参加するよう。

八月の旅行は、今年も定員不足で中止。中止したら、やはり群れたがりのメダカがいて八月三十一日一泊で房州旅行。旨い魚を満喫。

続いて、神奈川在住組が中心になって十一月十七日に横浜で食事会と称して集まる。

ゴルフは、去年は一回だけの開催となり十一月七日イトーピア千葉ゴルフで十八名が参加、早川杯を争い熱戦の末、往時の野球部四番打者小川桂一が優勝。

忘年会は、十二月二十日東京在住組が中心となり、田積夫妻が世話役をしてくれ、品川のホテルパシフィック東京で、神奈川や埼玉、千葉から四十五名が集まる。

早川先生にもご出席いただき。一年を締めくくり、来年も元気で居ろよと約す。

また、同期会とは別に、八月甲子園出場五十年の会を、当時のエース植草光長が音頭をとり、昭和二十八年出場時の一年から三年の野球部員、応援に夢中になった連中が男女交えて五十名程集まり五十年ぶりの思い出を懐かしむ。

戦後初代の野球部主将田中先輩、千葉高野球部応援のスタンドで何時も喇叭を吹き鳴らしてくる斎藤先輩、当時の千葉一高野球部後援会長柏戸先生のお嬢さんも参加していただき、初戦大敗したことなどそっちのけで、当時の話に酔いしれ、三時間以上も大騒ぎをする。

後輩野球部員にも、頑張つて甲子園出場を果たしてもらいたい、というのが全員の祈りでした。

今年の福の会総会は、卒業後五十年ということ、卒業記念アルバムを遅ればせながら作ろうと、現在編集作業中です。総会時には出来上がりしますので、総会には今まで出て来られなかった方も、是非出席してくれるよう待っています。

●昭和三十五年卒（珊瑚会）

町山公孝

二千三年十月二十七日（月）
一二五周年事業としてすすめてきました千葉高校・中学校の校歌碑の除幕式が行われました。

設計は三十五年卒の吉岡賢一君、書は昭和十一年卒業の金子

聰松先生です。ご両者にご出席いただき、校長先生、教頭先生ほか学校関係者、同窓会長、事務局長ほか校歌碑部会関係者の出席で、簡素ながらも素晴らしい除幕式となりました。除幕後、同窓会長のお声がかかりで、校歌を歌おうということになり昔の応援団長原田君の指揮で全員声高らかに歌って、入魂いたしました。

校歌碑部会の各委員が重要な役割をコツコツと果たしてくださり実に順調な進行で完成に至りました。校歌碑建設の提案から、足掛け四年となりましたが、同窓会の皆様はじめ珊瑚会の皆様のご理解ご支援にあらためて感謝申し上げます。同窓の皆様におかれてはこれを機会に母校をお訪ね下さり、一二五周年記念事業の成果をご覧いただきながら母校の最近の空気には是非お触れいただければと思います。

（校歌碑建設部会長）

追伸。珊瑚会は年二回のゴルフコンペ、月一度の探美会など昔の同級生に戻っての交流が、ますます盛んになっています。

●昭和三十六年卒

田那村宏

本年は創立記念事業が現実化し、学生生活のより豊かになることが期待されます。昨年二月二十二日創立一二五周年記念祝賀会兼総会を同期が担当いたしました。ご来賓・恩師の先生方・教職員の皆様・昭和二年卒の大先輩から平成十四年卒までの同窓生七三五名のご出席を頂きました。総会・記念式典は厳粛に、また和らいだ雰囲気で行われました。学生の爽やかなオーケストラ部ミニコンサート、オペラのリサイタルも華を添えました。祝賀会は一二五周年の慶賀で大盛会。次年度担当への引継ぎ、校歌を応援団OBの指揮で合唱全員一体となり、盛会裡に終わりました。同期は百三十名出席し、還暦の年に良き思い出創りとなりました。二次会では更に旧交を温め、総会への多くの出席と再会を誓った。

数年後に、母校から中学校同窓生が輩出することなど新たな歴史が積重なることを思いつつ、母校の発展を祈ります。

●昭和三十七年卒

駒井隆子
朝生邦夫

◎かつての私達の恩師であった稲葉正先生（千葉高在職は、二十八年間）は、ユニークな物理の授業で知られています。また、生徒の健康を守るため「千葉川鉄公害訴訟」の原告団長として勝利和解を勝ち取り、環境の保全に力を尽しました。

さて、今回の「千葉高の中高一貫制」の導入は、降って沸いたような話で、「安上がりで看板だけ掲げる」式のとんでもない拙速で御粗末な話でしかありません。稲葉先生はこの報道を聞いて「一晩眠れなかった」といいます。結局、働きながら学ぶ定時制高校生を追い出し、そこに全県一区の中学生を迎えられるやり方は、勤労青少年の学習権を奪い、全日制にも複数のコースを併存させ教育環境を悪化させるだけです。なによりも「目先の受験勉強一本槍」の予備校的授業ではなく、校歌にも歌われているように、自由で平和な世界人としての「普通教育」をめざす校是に反するもので

す。稲葉先生は高校紛争の痛烈な教訓から、その思いを三七会と同窓会に寄せてくれました。同窓会としても何等かの行動が求められていると思います。

◎さて、今年の二月十四日のバレンタインデーには、私達還暦を迎える三七会の主催で「千葉高同窓会総会」が幕張プリンスホテルで開かれます。一二五周年の記念事業完了の節目に、ぜひ沢山の同窓生が結集されるよう訴えます。豪華で質の高いアトラクションも用意してございます。旧交を暖める集いにしましょう。三七会は全日制・定時制(葛の花会)の理事が協力・共同して準備を進めています。ご協力をお願いします。

◎さて、今年も三七会の活動は、多方面に活発に展開されました。

「三七で歩く会」は、北ア葉師岳―立山連峰縦走、鳥海山などを含め、ほぼ毎月一回の山歩きを楽しんでいます。

「三七ゴルフ会」は春と秋のコンペ中心に多数の参加を得ています。

「三七旅行の会」は、夏に東北南部の岩手へ三泊四日の「熟年修学旅行」に行きました。

この他、冬には「三七スキークラブ合宿」を、夏には「三七海の会」を開催して、旧交を温め懇親を深めています。

サークル活動では「三七卓球の会」と「三七囲碁の会」とが、月に一から二回コミュニティセンターや会員宅で身体を動かし、頭を鍛えています。「三七釣友会」は海釣りを楽しみ、「三七カヌーの会」は、今年新たに「ヨット部会」を新設し航行を楽しみました。

お互いの連絡は、池田YICが管理する千葉高三七会HPや各サークルのMLを通じてネットを構築しています。他学年同期会HPとのリンクも張りつつあります。二〇〇三年忘年会で今年の活動のまとめをしました。二月には、「三七会年報」が発行され、本部同窓会に合わせて、三七同期会総会を開催する予定です。

三七会ホームページおよび各サークルの連絡先一覧は次記の通り。

HP

www.chibakou-yic.or.jp/37doukikai

三七会ML、幹事会ML、山の会ML、卓球の会ML、囲碁の会ML、釣友会ML、カヌーの会ML運営中。以上の照会はikedai@yic.or.jp

◎各種サークル・同好会の連絡先

○三七で歩く会……………石原治子

○三七ゴルフ会……………嵐 武夫

○三七囲碁の会……………加瀬絃男

○三七カヌーの会……………佐々木誠

○東京三七会……………櫻井武之

○三七スキーの会……………櫻井武之

○三七旅行の会……………市原忠雄

○三七カヌーの会……………幸治昌秀

○三七ヨット部会……………佐々木誠

○三七卓球の会……………石橋千恵子

●昭和四十年卒

谷中勝美

二十三年振りに同窓会を開催

三年前の事に成りますが、昭和五十二年以来二十三年振りに同窓会を開催しました。本会は

「OSB会(ワン、セコンド、ビークラス)と称し、当時、一年B組と二年B組だった友達同士が

何故か、一番印象深く卒業後即結成したクラス会です。それまでは毎年開催していました。ところが、いつのまにか途絶えてしまいました。ここにきて三年連続して開催しています。いつも、出席者は十名から十四名前後ですが、お互いの心境を語り合い乍ら、和気会々楽しい一時を過ごしています。来年も開催する予定です。

●昭和四十四年卒

森 茂

『世代感覚』

昨年関わった二つの同窓会は、いずれも私達の学年が幹事を勤めました。社会人としておよそ三十年、人生経験を重ねて五十三歳。公私にわたる自信がバランスよく具わり、丁度社会に役立つ世代なのでしょう。同時に、新聞を見れば、社会の悪事の主役も張っており、善悪両様のリーダーたらんとしているかのようです。

『人生飄として塵の如し』

盛年は重ねて来たらず

時に及んで当に勉勵すべし
歲月は人を待たず』

(陶淵明「雜詩」から)
 職場で倒れて、そのまま旅立
 ってしまった同期も居り、幸せ
 を公私ともに味わうためには、
 健康にも気をつけなくてはいい
 ない年齢となりました。

この頃妙に身にしみて感じら
 れる『世代感覚』の光と影をご
 紹介しました。

(いよいよ、二〇〇五年は第
 二回の同期会です。元気で会い
 ましょう！)

●昭和四十八年卒

大野まさよ

平成十五年六月七日、昭和四
 十八年卒女性だけの親睦会「葛
 花会」がデイズニー・シー園内
 のホテル・ミラコスタで開催さ
 れ、全六十八名中三十五名と同
 伴のお子様三名がにぎやかな午
 餐のひとときをすごしました。
 卒業して三十年。五十路を目前
 にして一日くらは童心に返っ
 て遊ぶのも一興と、会終了後、
 デイズニー・シーで夜まで過ご
 したグループもありました。参
 加できなかつた方も含めてまと
 めた近況の小冊子も好評で、連
 絡を取り合うきっかけになった

とのこと。子育てや仕事一筋に
 まい進んで来た今までのライフ
 スタイルも、そろそろギアチェ
 ンジの時期。旧友どうしのネッ
 トワークをより一層大切にして
 いきたいと思えます。

支部だより

☆東京葛城会

東京葛城会会長 中村浩紹

(昭和二十九年卒)

第四十四回総会・懇親会は、
 平成十五年十月九日(木曜日)
 午後六時より、明るく落ち着い
 た雰囲気になされた上野精養
 軒にて大野敬三学校長、依田寛
 市先生をお迎えして開催されま
 した。

一四〇余名の同窓が集い、幹
 事役の昭和四十四年卒業の諸君
 の準備によって賑やかに幹事櫛
 部健夫君の司会進行で進められ
 ました。

会場正面には、当会にて作成
 した茶褐色の布地に校章の「中」
 「高」の文字を浮び上がらせた
 千葉中学校校旗と千葉高等学校校
 校旗(四十二年卒平田敏行君デ

ザイン)が掲げられ、葛城健児
 ここにありと会場を葛城台の青
 春の想いに充ちあふれさせるも
 のでした。

会長挨拶の中で、東京葛城会
 は、既に明治十七年に発会した
 「京舊千葉中學生談親會」が嚆
 矢であるとの次のような新聞記
 事が幹事飯田貫太郎君によって
 発掘されたことが報告されて、
 参会者一同、東京葛城会の生い
 立ちの歴史に驚嘆の声があがり
 ました。



千葉公報明治十八年一月二十
 八日号

「在京舊千葉中學生談親會
 該會は當地中学校卒業生及び當

時在学せる者の會合にして毎月
 第四日曜日午後二時を期して該
 地神田萬世橋外青柳亭に相会し
 互いに一致共同を旨とし演説討
 論談義等を為すの例規にて昨年
 十月に始まりたるものなり。去
 る二十四日は恰も其第三回に當
 り當日午後二時より該亭に會す
 るもの二十名。會會員諸氏互に
 に懇談親議する所あり。殊に當
 中學校卒業生中鏘々の間へある
 影山益吉、大和久菊次郎、木内
 重四郎、柴原亀二其他諸氏は皆
 快活の説を演べ終りて宴會を開
 きしが最盛會にてありたる由。
 該地より通知。」



昭和三十五年に再興された東京葛城会は、まさに千葉中創立当初と同じように多士済々の有志同窓が集って時世を論談し合い、かつ親睦の輪を広げながら同窓の絆を大切に育んで活動してきた歴史を持っているので

す。
本年第四十五回東京葛城会は、平成十六年十月二十一日（木曜日）午後六時上野精養軒にて開催いたしますことが決定しておりますので、多数の同窓生の参加をお待ちいたします。

幹事会は、四月十六日（金）、十月六日（水）、十二月九日（木）午後六時同一会場にて開催いたします。幹事会では、出席者が順時近況報告や所感を述べるのが恒例となっており、まさに論談親議の場でもありません。有志の方は、是非お集まりください。

☆市原葛城会(養信会)

中村好成

(昭和三十四年卒)

五月十日(土) 五井グランドホ

テルにて、支部総会を開催。六十四人も多くの皆様方にご参加を頂き、そのうえ、霜会長さん、大野新校長先生にもご出席頂き、小出市長を中心に、大いに盛りあがった会となりました。

これからも、さらに盛大な会にしたいと幹事一同考えております。

☆長生茂原葛城会

永野 剛

(昭和二十六年卒)

平成十五年十月四日、四十八回支部総会を開催。母校から菅井修先生が出席され話も弾み、昨年に続き二十六卒・久木元健二君のマジックがあり、楽しい会でした。

私は十八回総会より支部事務局を勤めました。同窓会は卒業年度別に組織されていますので、地区会員となる必然性はなく、一方的な連絡に違和感を持つこともありました。三十年もよく続けたものと、感慨深いものがあります。ひとえに、会

員皆様、母校関係者各位のご支援によるものと感謝いたします。

今回、新支部長として二十六卒常泉吉朗君を選出いたしました。母校理事を誰にお願いするか、事務局内の役割分担をどうするかについては、常泉新会長、三十卒穴倉正胤、三十六卒加瀬元、三十九卒山口光済の四氏と元事務局の私も含め、近々穴倉氏の肝煎りで事務引き継ぎをかねて相談することになっております。決定次第母校事務局に報告いたします。

当支部総会がより楽しく開催されていくことを願っております。

☆東金葛城会

支部長 穴倉 實

(昭和二十七年卒)

文責 岸本雅邦

(昭和三十九年卒)

東金葛城会は山武東金地区の同窓生の親睦の会として昭和五十八年に発足（初代会長昭和二十年卒上田鉄雄）をしました。地

元出身又は地元勤務が会員資格でしたので名簿作りは大変であったと記憶をしています。発足から今年で二十二回目に入りますが、この間歴代同窓会会長には東金迄足をお運びいただき恐縮しております。昭和六十年には松戸会長、昭和六十三年には飯豊会長、平成九年には沼田知事、平成十年からは霜会長がお見えになり県立千葉高の現況又同窓生の御活躍の状況等のお話をお聞きし、楽しいひと時を過ごしております。最近毎年四月（今年は三日）の東金の桜の花見・花火大会の日に東金葛城会を開催し、八鶴湖の桜のライトアップと花火とお酒で盛り上がっております。

☆成田葛城会

真鍋 溥

(昭和三十一年卒)

平成十五年十一月十五日（土）、成田山新勝寺参道の第二ひかた屋において、成田葛城会発起人会が開かれ、引き続き第一回成田葛城会が開催されまし

た。石川江己君が霜同窓会会長にお会いした折、成田支部会を結成する様、私と二人で準備してほしいとの依頼があり、三人は同期でもありこれを引き受けました。創立百二十周年年度版同窓会名簿より成田市在住の名簿を作成、三十七名全員に発起人会開催の通知をし、十四名の方

にお集り頂きました。発起人会に続き正式な成田葛城会を霜會長のご指導のもとに立ち上げる事が出来喜ばしい限りです。この会ではまず支部長、事務局長を選出、多くの先輩がいらつしやいましたが、霜會長と同期と云う事で、私が支部長、石川君が事務局長に選出されました。その後、ご来席頂きました霜會長にご挨拶をいただき、又一人一人の自己紹介など時間のたつのを忘れるほど、なごやかで楽しい交流の場となりました。これから市町村合併もあります、周りの市町村へも輪を拡げて行いたいと思います。古い名簿で作成した支部名簿です、新しい卒業生や漏れた方、又、新しく成田へいらつしやった方等、多くいらつしやると思われますので、事務局まで一報

頂ければ幸いです。尚向後定期総会を十月第一土曜日開催と致しました。

事務局 成田市山之作一六四
石川 江己

TEL〇四七六(二二)〇八八五
FAX〇四七六(二二)〇八九四

特別寄稿

本校の元教員稲葉正先生より投稿がありましたので、ひとつのご意見として掲載させていただきます。

「千葉高校の中高一貫制について考える」

元千葉高校教員 稲葉 正

千葉高校を定員八十名ほどの中高一貫制高校にするという案が報道されています。よほど英才が好きの方の御発案と思われる。そのような制度の学校を、ためしにどこかに作られることに特別に反対するものではありません。しかし千葉高校を、そのようないわゆる「エリート高」でないしは「進学専門高校」に変

えることはどうしてもおやめになつて下さい。衷心よりお願い申し上げます。

千葉高校は何びとをも差別することなく、門戸を開いてきた普通の高校です。志をたてて多少の努力をすれば誰でも入れる普通の高校です。男女の差別もありません。成績によるクラスわけを止めさせた歴史があります。能力差別の臭いがする理数系を設けることを拒否してきました。あくまでも普通の生徒を差別なく扱って、バランスのとれた普通の社会人に育てるのが目的の学校です。

かつて進学関係の大手出版社である旺文社が、千葉高校に「進学指導学習の秘訣」を問い合わせてきました。これに対する千葉高校学習指導部の回答が「ひとつの断」になっています。いわく「本校では進学指導学習ということをやったことがありません」というのです。その心は、「生徒は学問のおもしろさを感じて、銘々の意欲によって進学をしようとゆくのだ」ということです。もちろんそのためには教員が十分な時間と自由が与えられて、授業の準備に工夫

を積んで、感銘の深い授業をしなければなりません。このような骨折りは教師の本能ですから、それぞれの学校でいつも追求されていることでもあります。

千葉高校はこういう意味で受験だけが目標ではない普通の教育をするところです。千葉高校の卒業生は「いわゆる進学校」的でない教育を受けたことを誇らしく感じているようです。それゆえ三年生になつても部活動を隠居しない者が多く、大学受験に必要でない地学の巡検に全員そろって出かけたりましたものです。

重ねて言いますが千葉高校は少人数制のエリート校でなくてよいのです。普通規模の高校で結構なのです。少人数制の中高一貫校では、小学校から入学試験をパスしてくるために大変な無理があり、受験競争の低年齢化を招き、それぞれの年齢に求められる健全な生活が損なわれるおそれが多分にあります。

ある人いわく、「千葉高校にはもともと能力に恵まれたせいとばかりが入つてくるのだから、受験勉強を軽くあしらっているのだ。」と。

しかし、そうではなかったのです。地域選抜制というのが行われて、学力検査の合格者を地域の高校に平等に分配した時代がありました。地域での最低点の合格者が千葉高校に振り分けられることもありました。ところが千葉高校では相変わらず何の差別も考えず「普通の教育」を行いました。心配されたような学習不適合は全くなく、従前と比べて遜色のない卒業生を送り出してきたのです。

しあわせな話ばかり述べてきましたが、千葉高校の教育の真価が問われた「危機」がありました。一九六九年から翌一九七〇年の春にかけて全国的に吹き荒れた「学校紛争」です。千葉高校も近隣の大学や高校から働きかけが盛んで、外部からの煽動も烈しく、「教師は敵」という論が圧倒的な勢いでした。千葉高校の図書館に立てこもって封鎖する者が現れたり、県警本部長が直接指揮する数百人の機動隊と、ほとんど全校の千葉高校生が故鈴木一郎校長をはじめとする教職員を間にはさんで激しくもみ合うような事態がありました。

それは紛争が終わりになった日のことです。その日行われた卒業式を「粉碎せよ」と叫んでスクラムを組んで数隊が突入してきました。その突入者の一団をくい止めて、対面したスクラムの先頭の日君に「君たちは我々教師を本当に敵だと思おうか？」と呼びかけた時、彼の目からあられのようにまわりに散った涙を見て、「これは確かに我々の生徒」だと感じ、こんな美しい涙をはじめて見たおもしろい。

もう一つの突入集団は外来の大学生が多く、この集団と問答をはじめた時、スクラムをリードしていた千葉高生徒のK君が突然「オレはあんたの授業に惚れ込んでいたんだ！」と叫び出したので外人部隊は「Kは裏切るのか？」と混乱してしまつて、突入は沙汰止みになり、一件落着となったわけだ。

この紛争のほぼ一年の間、「授業放棄」を叫ぶ生徒に対して、生徒が1人でも残っておれば一対一でも授業を遂行する教員が現れ、「授業死守」というその方針が紛争を終息させた最大の原動力になりました。

このような、学問へのあこがれを中にはさんで、生徒と教員との心のつながり合いが、千葉高校のささやかな伝統であります。これを消し去ることはできません。疑問の残る新制度を以ておきかえることは将来に禍根を残す大きな損失になるでしょう。千葉高校の現体制を崩すことのないよう、重ねてお願い申し上げます。

葛城だより

◎受賞の方を紹介します。おめでとうございます。

勲四等旭日小綬章

菰田 康雄 (昭26)

勲四等瑞宝章 松村 知 (昭27)

黄綬褒章 小仲井誠次 (昭27)

旭日中綬章 酒井 巖 (昭20・4)

瑞宝中綬章 渡辺 幸則 (昭27)

瑞宝小綬章 館野 一男 (昭23)

瑞宝小綬章 小川 秀男 (昭27)

旭日双光章 明智 克夫 (昭27)

◎平成十五年に逝去された方をお知らせします。ご冥福をお祈りします。

りします。

●理事役員

石渡道之助 (昭3) 2月25日

森田 竹次 (昭6) 4月1日

香川 成治 (昭12) 11月13日

平塚 和夫 (昭20) 10月6日

●恩師

宍倉 英男 (社会) 8月13日

亀原 壮夫 (国語) 5月11日

編集後記

大寒の頃は晴れた朝に学舎三階から真白な富士を眺望し、清爽な気を感じて授業に向います。

同窓会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年度も多くの原稿をありがとうございます。特に、九十歳を越えられてもお元気で、五年ぶりに後輩への励ましを寄せてくださった桜井様や、校歌の原典を綿密に調査され、その結果を発表してくださった鈴木様、また、中高一貫の問題にご意見を寄せてくださった稲葉先生など、前号とは一味違った会報ができました。改めて御礼申し上げます。(五木田)